## 開催報告　第21回日本医療マネジメント学会学術総会

### 第21回日本医療マネジメント学会学術総会

会長　絹川常郎
（独立行政法人地域医療機能推進機構中京病院院長）

第21回日本医療マネジメント学会学術総会を2019年７月19日（金）、20日（土）に名古屋市で開催いたしました。名古屋での開催は、稲垣春夫トヨタ記念病院院長（現名誉院長）が第10回の学術総会会長を務められて以来11年ぶりとなります。会場は前回と同じく名古屋国際会議場としました。

日本医療マネジメント学会は、クリティカルパスに始まり、医療安全、医療連携などを中心に医療現場の運営の改善に繋がる多くの分野に取り組んできています。学術総会のテーマを以前からの学会の流れを取り入れつつも、今日の新しい視点も取り入れたく検討しました。そこで当時は、「働き方改革」という話題には上がるものの、医療界ではその取り組み方について暗中模索状態であったものを取り上げ、メインテーマを、「私たちの働き方改革～良質で成熟した日本の医療をめざして～」といたしました。2015年の電通事件を契機に突然始まった感のあるわが国の働き方改革ですが、産業界で今進められているのは、もちろん長時間労働の改善もありますが、最大の目的は労働生産性の向上にある事は明らかです。しかし、医療界ではこの業界特有の問題があり、これしかないという単純な解決策は見出せていません。「参加者全員の知恵を集めよう」という姿勢で、プログラムの準備を始めました。基調講演、会長講演の他に、招待講演２題、特別講演３題、教育講演4題、教育セミナー２題、シンポジウム13題の他、新しい試みとして、一般演題の一部を５題のミニシンポジウムとし、多くの学会会員に議論を活発に行っていただけるようプログラムを整えました。

開会式
会長挨拶

開会式には、大村秀章愛知県知事にご参列いただき、祝辞を賜りました。知事は、衆議院議員時代には厚生労働省関連の仕事を精力的に行われた方ですので、この学会の活動の趣旨を理解したご挨拶でした。公務多忙の中にご出席をいただきましたこと、篤く感謝申し上げる次第です。また、第30回日本医学会総会2019中部を４月に会頭として開催されたばかりの齋藤英彦先生にも温かいお言葉をいただき、独立行政法人地域医療機能推進機構の尾身 茂理事長には、JCHOが学会をサポートしていることに言及していただきました。

会場風景

開会式に引き続き宮崎久義理事長より基調講演がありました。タイトルは、「医療・介護・福祉現場の課題解決に向かって－学会活動の展開を考える－」でした。学術総会の歩み、クリティカルパスの普及のこと、医療福祉連携士のこと、医療安全のこと、人材育成などについて語られ、今後の学会活動の展開についてお話しいただきました。

続いて、A会場はメインシンポジウム「働き方改革」に移りました。このシンポジウムには５名のシンポジストで２時間をとり、座長は、岡留 健一郎福岡県済生会福岡総合病院名誉院長と日本看護協会の熊谷雅美常任理事にお願いしました。主催者としては同時進行のシンポジウムを少なくし、多くの参加者がこの問題の論点を広く理解される事に配慮しました。

講演は、まず厚生労働省の安里 賀奈子医政局医療経営支援課医療勤務環境改善推進室室長に「医療を未来へつなぐために、医師の働き方改革－No Change, No Future－」と役人のものとは思えない刺激的な題名でトップを切っていただきました。このメッセージは、「働き手が少ない社会の到来で、医療界がその特殊性を主張するあまり勤務環境の改善に後れを取ると他業種に人材を取られる」との警告で始まりました。参加者が皆、働き方改革に取り組む必要性を強く感じさせられた講演でした。

岡留 健一郎先生は厚生労働省の医師の働き方改革に関する検討委員会は多くの関連会議で委員としてこの問題に取り組まれて来られました。今回は「医師の働き方改革－2024年にむけての取組みの重要性－」という題で、５年間猶予された医師の労働時間の短縮を2024年に向けてどう取り組むのかという視点で語られ、「今後、医療機関は労務管理を徹底し、労働時間短縮と医療提供体制の再構築に取り組むことが重要であり、熱心に活動する医師がこれから先、労務管理が適正化された中で安心して働けることが、今後の日本の医療にとって重要である。」という言葉で講演を締めくくられました。